

# 荒野への旅立ちに向けて



理工学部長

かざま  
風間 重雄  
しげお

この春に理工学部を卒業する皆さんがちょうど高等学校に入学した頃、ヨーロッパ諸国・日本・アメリカなどが参加している経済協力開発機構（OECD）より、「Science and technology in the public eye（一般市民の見た科学と技術）」と題する報告書が公刊された。そのなかに「四力国で調査された「一般市民の科学的知識」と「一般市民の科学への関心度」でわが国はダントツで最下位となり、科学政策担当者や理科教育関係者に大きな衝撃を与えた。その後、日本人からノーベル化学賞・

物理学賞の受賞が相次いだことから、多少は一般の人たちのあいだでも科学・科学技術に対する興味や関心も増したかとも考えられるが、わが国全体としての科学離れ・無関心には基本的に変化はないと考えてよい。たとえば、高度な先端技術からなる携帯電話がときには一円で売られる

状況が続き、景気回復の原動力ともなっていたデジタル家電製品も、最近では投げ売りされて原価割れとなり有力企業が撤退するという事態になっている。見方によっては、科学者・技術者という高度知識人が搾取されていることになる。

皆さんが理工学部で苦心惨憺して習得した理工学の専門知識も社会において素直に評価されるとは限らない。荒涼たる知的砂漠に出ていくようなものである。しかし、その時に羅針盤やGPS等の代わりにするのは、ほかでもない大学で学びとつた基礎知識であり、課題設定・解決能力であり、合理的なものの考え方である。専門知識の賞味期限はそれほど長くはないが、基礎・基盤として身に付けたものは、必ず生涯の財産になる。卒業生の皆さんの今後の活躍を祈念してやまない。